

〔巻頭言〕

## SPF 豚の将来展望

波 岡 茂 郎

はじめに東日本大震災で被災された方々とその御家族に心から御見舞申し上げますとともに、多くの亡くなられた方々に御悔やみ申し上げます。また一日も早い復旧および復興を心から願っております。なお此度の震災では福島第一原発の電源停止によって放射線燃料が溶解し、そのため高濃度放射線汚染を避けるため、原発を中心とした半径20キロ以内が避難区域となり、この域内すなわち浪江町にあった SPF 養豚場における飼育豚約1万頭が放置されるという非情な事態が発生しております。

ところで養豚大国デンマークでは原発の設置を認めず、風車による発電など自然エネルギーの開発が進められていることは周知の事実です。一方、デンマークの養豚産業はわが国の自動車産業と比較することが出来ます。すなわち、いずれも国の基幹産業として国の経済の主要な部分を支えているからです。デンマークにおける養豚家はきわめて高いレベルの技術や知識をもっており、かつ500年以上にもおよぶ伝統がこれを支えています。またデンマークでは養豚に関するあらゆる技術や流通・輸出を荷うベーコン協会という機構が存在し、これに所属する獣医師は緊密に養豚家と連絡を取り、種々の疾病対策や飼育管理、繁殖成績の向上などの指導を行っております。これに対し養豚家は忠実にこれを実践し生産性をより一層

向上させる努力を行っております。しかし1970年の始め頃からベーコン協会ではコンベンショナル豚の飼育ではその生産に限界があるとの認識をもち、SPF豚の技術を導入し、あらゆる角度からコンベンショナル豚とその成績を比較したところ、SPF豚の優位性が明らかになったと結論づけました。これによって1972年頃からベーコン協会ではSPF豚による飼育方法の普及に努め、現在では全飼育豚の約70%がSPF化されております。流石はデンマークです。

ひるがえってわが国では1955年頃までの養豚はいわゆる庭先養豚と称して子豚市場から数十頭を導入し、これを残飯によって肥育して出荷するというのが一般的でした。その頃、このような養豚家も含めて20万戸以上が存在していましたが、飼育技術や衛生観念では一般にかなり低いレベルだったといえるでしょう。しかし1965年を過ぎると、わが国の養豚事情も一変し、戦後の高度経済成長に支えられて動物タンパクの摂取量が増大するに伴い、ヨーク、パークに代わって大型品種の導入、多頭飼育、企業養豚へと変貌して行きました。丁度その頃わが国で畜産目的のためのSPF豚生産が試みられることとなりましたが、その経緯についてはすでに周知のことと存じます。本来SPFやノトバイオート動物は高度な研究のために用いられる実験動物として作出されましたが、こ

れが豚で、しかも畜産目的で利用するに至ったということは正に大きな発想の転換でした。これを1952年に初めて行った米国ネブラスカ大学のYoung および Underdahl の足跡はその意味でまことに敬服に値します。

ところで、去る6月28日(2011)に東京の学士会館で第21回日本SPF豚研究会(会長井上忠恕)が開かれました。その際のセミナーで日本SPF豚協会の藤田世秀氏が「SPF認定農場の生産成績年次報告:平成22年度(2010)」という演題で発表されておられます。その詳細については本誌に掲載されているので御参照下さい。すなわち、SPF豚の生産実績は当初の目的に近づいております。このような成績が出される理由は飼育豚がSPF状態にあることはもちろんですが、一

方でこれらを扱う養豚家のレベルの高さにあります。すなわち、そのレベルとは獣医師のもつ疫学および家畜管理学の知識をかなり修得していることです。(注:2010年にアニマル・メディア社から日本SPF豚協会編・山本孝史監修の「ハイヘルス養豚への挑戦ー健康“優良豚”SPF豚40年の軌跡と将来展望」が出版されております)このような人々の飼育するSPF種豚(PS)が今やわが国の種豚総数の約10%に達したということは、これら一連のシステムに関わった方々が如何に努力されてきたかを裏付けているように思われます。今後わが国における養豚産業発展のうえにSPF豚をどのように普遍的な存在として発展させて行くのか、SPF豚協会や研究会の一層の働きが期待されます。